

事後評価報告書(日-フランス研究交流)

1. 研究課題名: 「並列スケルトンを用いた並列プログラム開発に関する研究」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 公立大学法人高知工科大学情報学群 准教授 松崎 公紀

2-2. 相手側研究代表者: オルレアン大学理学部 准教授 Frédéric Dabrowski

3. 総合評価: (A)

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

日本側とフランス側のチームが、それぞれ得意とするこれまでの成果を持ち寄って、効率の良い並列プログラムの系統的開発手法の提案を目指すものであり、最終的に、両国チームの協力がなくては得られなかったであろう成果がうまれたことは評価できる。例えば、日本側は、本プロジェクトによって、定理証明系のノウハウをフランス側から得ることができた。またフランス側と共著論文も発表された。

ジャーナル論文 2 編、国際会議論文 7 件が執筆されたが、フランス側との共著は、国際会議論文 2 編である。研究開始時期の遅れなど、いろいろな要因はあるが、もう少し共著論文が多く発表されていれば、更に高評価が得られたらう。

(2) 交流成果の評価について

博士課程学生やポスドクの交流計画などの研究者の短期訪問、四半期毎のミーティング、共同研究ツールの利用、知的財産権の取り扱いなど、プロジェクトを遂行するに当たり、共同プロジェクトのマネジメントが最初から計画されていた点は評価できる。

大きな問題ではないが、フランス側の渡航回数と、日本側の渡航回数に大きな差があり、交流に偏りが見られる。

(3) その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

本領域はまだまだ多くの解決すべき課題があると思われるので、本プロジェクトで得られた成果を元に、プログラム言語を用いた証明支援システムの一つである Coq を用いたプログラム開発手法の研究など、今後の発展が期待される。